

森
鷗
外

寒
山
拾
得



寒^{かん}

山^{さん}

拾^{じゅう}

得^{とく}

唐とうの貞観じょうがんの頃だと云うから、西洋は七世紀の初はじめ日本は年号と云うもののやっとな出来掛かつた時である。

閩りよきゆういん丘胤と云う官吏がいたそうである。尤もつともそんな人はいなかっただらしいと云う人もある。なぜかと云うと、閩は台たいしゆう州しゆうの主簿しゆぼになつていたと言ひ伝えられているのに、新旧の唐書に伝が見えない。主簿と云えば、刺史ししとか太守たいしゆうとか云うと同じ官である。支しな那全国が道どうに分れ、道が州又は郡に分れ、それが県に分れ、県の下に郷ごうがあり郷の

下に里りがある。州には刺史と云い、郡には太守と云う。一体日本で県より小さいものに郡の名を付けているのは不都合だと、吉田東伍さんなんぞは不服を唱えている。閩が果して台州の主簿であつたとすると日本の府県知事位の官吏である。そうして見ると、唐書の列伝に出ていはする筈だと云うのである。しかし閩がいなくては話が成り立たぬから、ともかくもいたことにして置くのである。

さて閩が台州ちやくにんに著任ちやくにんしてから二日目になつた。長安ちやうあんで北支那の土埃つちほこりを被かぶつて、濁つた水を飲んでいた男が台州に来て中央支那の肥えた土を踏み、澄んだ水を飲む

ことになったので、上機嫌である。それにこの三日の間に、たにんず 多人数の下役が来てえっけん 謁見をする。受持々々の事務を形式的に報告する。そのあわ 慌ただしい中に、地方長官の威勢の大きいことを味って、意気揚々としているのである。

閻は前日に下役のものに言って置いて、今朝は早く起きて、天台県のこくせいじ 国清寺をさして出掛けることにした。これは長安にいた時から、台州に著ついたら早速往ゆこうと極きめていたのである。

何の用事があつて国清寺へ往くかと云うと、それには因縁がある。閻が長安で主簿の任命を受けて、これから

任地へ旅立とうとした時、生憎あいにくこらえられぬ程の頭痛が起った。単純なレウマチス性の頭痛ではあつたが、閻は平生から少し神経質であつたので、掛かり附の医者いしやの薬を飲んでもなかなかなおらない。これでは旅立の日を延ばさなくてはなるまいかと云つて、女房と相談さうだんしていると、そこへ小女こおんなが来て、「只今御門の前へ乞食坊主こじきぼうずがまいました、御主人にお目に掛かりたいと申しますがいかがいたしましよう」と云つた。

「ふん、坊主か」と云つて閻は暫しばしばく考えたが、「とにかく逢つてみるから、ここへ通せ」と言い附けた。そし

て女房を奥へ引つ込ませた。

元来閩は科挙に応ずるために、けいしよ経書を読んで、五言の詩を作ることを習ったばかりで、仏典を読んだこともなく、老子を研究したこともない。しかし僧侶そうりよや道士と云うものに対しては、何故なげと云うこともなく尊敬の念を持ってゐる。自分の会得えとくせぬものに対する、盲目の尊敬とでも云おうか。そこで坊主と聞いて逢おうと云ったのである。

間もなく這入はいつて来たのは、一人にんの背の高い僧であつた。垢あかつき弊やぶれた法衣ほうえを着て、長く伸びた髪を、眉の上

で切っている。目に被さつてうるさくなるまで打ち遣つて置いたものと見える。手には鉄鉢てっぽつを持っている。

僧は黙って立っているので閻が問うてみた。「わたしに逢いたいと云われたそうだが、なんの御用かな。」

僧は云った。「あなたは台州へお出いでなさることにおなりなすつたそうでございますね。それに頭痛に悩んでお出なさると申すことでございます。わたくしはそれを直して進ぜようと思つて参りました。」

「いかにも言われる通で、その頭痛のために出立しゅつたつの日を延ばそうかと思つていますが、どうして直してくれら

れる積つもりか。何か薬方でも御存じか。」

「いや。四大の身を悩ます病は幻でございます。只清しやう浄じやうな水がこの受糧器に一ぱいあれば宜しい。呪まじないで直して進ぜます。」

「はあ呪をなさるのか。」こう云って少し考えたが「仔細しさいあるまい、一つまじなって下さい」と云った。これは医道の事などは平生深く考えてもおらぬので、どう云う治療ならさせる、どういいう治療ならさせぬと云う定見がないから、只自分の悟性に依頼して、その折々に判断するのであった。勿論もちろんそう云う人だから、掛かり附の医者と

云うのも善く人選にんせんをしたわけではなかった。素問そもんや靈枢れいすうでも読むような医者を探して極きめていたのではなく、近所に住んでいて呼ぶのに面倒のない医者に懸かっていたのだから、ろくな薬は飲ませて貰うことが出来なかったのである。今乞食坊主に頼む気になったのは、なんとなくえらそうに見える坊主の態度に信を起したのと、水一ぱいでする呪なら間違とちがった処ところで危険な事もあるまいと思つたのとのためである。丁度東京で高等官連中が紅療治べにりょうじや気合術に依頼するのと同じ事である。

閻は小女を呼んで、汲立くみたての水を鉢はちに入れて来いと命じ

た。水が来た。僧はそれを受け取って、胸に捧^{ささ}げて、じつと閻を見詰めた。清浄な水でも好ければ、不潔な水でも好い、湯でも茶でも好いのである。不潔な水でなかったのは、閻がためには勿^も怪^{つけ}の幸^{さいわい}であった。暫く見詰めているうちに、閻は覚えぬ精神を僧の捧^{ささ}げている水に集注した。

この時僧は鉄鉢の水を口に銜^{ふく}んで、突然ふつと閻の頭に吹き懸けた。

閻はびっくりして、背中に冷汗が出た。

「お頭痛は」と僧が問うた。

「あ。癒なおりました。」 実際閻はこれまで頭痛がする、頭痛がすると気にして、どうしても癒なおらせずにいた頭痛を、坊主の水に気を取られて、取り逃がしてしまったのである。

僧は徐しずかに鉢に残った水を床に傾けた。そして「そんならこれでお暇いとまをいただきます」と云うや否や、くるりと閻に背中を向けて、戸口の方へ歩き出した。

「まあ、一寸ちよつと」と閻が呼び留めた。

僧は振り返った。「何か御用で。」

「寸志のお礼がいたしたいのですが。」

「いや。わたくしは群生ぐんしやうを福利し、憍慢きやうまんを折伏しやくぶくするために、乞食こつじきはいたしますが、療治代は戴いたきませぬ。」

「なる程。それでは強いては申しますまい。あなたはどちらのお方か、それを伺って置きたいのですが。」

「これまでおった処でございますか。それは天台の国清寺で。」

「はあ。天台におられたのですな。お名は。」

「豊干ぶかんと申します。」

「天台国清寺の豊干と仰おつしやる。」問はしつかりおぼえて置こうと努力するように、眉ひそを顰ひそめた。「わたしもこ

れから台州へ行くものであつて見れば、殊ことさらお懐かしい。序ついでだから伺いたいが、台州には逢いに往いつて為ためになるような、えらい人はおられませんか。」

「さようでございます。国清寺じつとくに拾得と申すものがおります。実は普賢ふげんでございます。それから寺の西の方に、寒巖かんがんと云う石窟せつくつがあつて、そこに寒山かんざんと申すものがおります。実は文殊もんじゆでございます。さようならお暇をいたします。」こう言つてしまつて、ついと出て行つた。

こう云う因縁があるので、閻は天台の国清寺をさして出懸けるのである。

全体世の中の人の、道とか宗教とか云うものに対する態度に三通りある。自分の職業に気を取られて、唯えいえい営々役々えきえきと年月としつきを送っている人は、道と云うものを顧みない。これは読書人でも同じ事である。勿論書を読んで深く考えたら、道に到達せずにはいられまい。しかしそうまで考えないでも、日々の務つとめだけは弁じて行かれよう。これは全く無頓著むとんちやくな人である。

次に著意なげうして道を求める人がある。専念に道を求めて、万事を抛なげうつこともあれば、日々の務は怠らずに、断え

ず道に志していることもある。儒学に入^いっても、道教に入^いっても、仏法に入^いっても基督教クリストに入^いっても同じ事である。こう云う人が深く這入り込むと日々の務すなわが即ち道そのものになつてしまふ。約つづめて言えばこれは皆道を求める人である。

この無頓著な人と、道を求める人との中間に、道と云うものの存在を客観的に認めていて、それに対して全く無頓著だと云うわけでもなく、さればと云つて自ら進んで道を求めるでもなく、自分をば道に疎遠な人だと諦念あきらめ、別に道に親密な人がいるように思つて、それを尊敬

する人がある。尊敬はどの種類の人にもあるが、単に同じ対象を尊敬する場合を顧慮して云って見ると、道を求める人なら遅れているものが進んでいるものを尊敬することになり、ここに言う中間人物なら、自分のわからぬもの、会得することの出来ぬものを尊敬することになる。そこに盲目の尊敬が生ずる。盲目の尊敬では、偶たまそれをさし向ける対象が正鵠せいこくを得ていても、なんにもならぬのである。

閩は衣服を改め輿よに乗って、台州の官舎を出た。従者

が数十人ある。

時は冬の初で、霜が少し降っている。椒江しやうこうの支流で、始豊溪しほうけいと云う川の左岸さがんを迂回うかいしつつ北へ進んで行く。初くもめ陰くもっていた空がようよう晴れて、蒼白あおしろい日が岸の紅葉もみじを照している。路みちで出合う老幼は、皆輿こしを避けてひざまず跪ひざまずく。輿こしの中では閭けんがひどく好い心持になっている。牧民の職しやくにいて賢者けんしやを礼すると云うのが、手柄てのように思われて、閭けんに満足を与えるのである。

台州から天台県までは六十里半程である。日本の六里半程である。ゆるゆる輿こしを昇ゆかせて来たので、県から役

人の迎えに出たのに逢った時、もう午ひるを過ぎていた。知
 県の官舎で休んで、馳走つまさきになりつつ聞いてみると、ここ
 から国清寺までは、爪尖上りの道が又六十里ある。往き
 著くまでには夜よに入りいりそうである。そこで閭は知県の官
 舎に泊ることにした。

翌朝知県に送られて出た。きょうもきのうに変わらぬ天
 気である。一体天台一万八千丈とは、いつ誰が測量した
 にしても、所詮しよせん高過ぎるようだが、とにかく虎はかどのいる山
 である。道はなかなかきのうのようにははかど抄らない。途
 中ひるめしで午飯を食って、日が西に傾き掛かった頃、国清寺の

三門に著いた。智者大師ちしやだいしの滅後めつごに、隋ずいの煬帝ようだいが立てたと云う寺である。

寺でも主簿ごさんけいの御参詣ごさんけいだと云うので、おろそかにはしない。道翹どうぎょうと云う僧どうぎょうが出迎えて、閭かを客間に案内した。

さて茶菓きようおの饗応きようおうが済むと、閭かが問うた。「当寺に豊干と云う僧がおられましたか。」

道翹が答えた。「豊干と仰おっしやいますか。それは先頃まで、本堂ほんどうの背後うしろの僧院そうえんにおられましたか、行脚あんぎやに出られたきり、帰られませぬ。」

「当寺ではどう云う事をしておられましたか。」

「さようでございます。僧共の食べる米を舂ういておられました。」

「はあ。そして何か外の僧達と変わったことはなかったのですか。」

「いえ。それがございましたので、初め只骨惜みをしない、親切な同宿だと存じていました豊干さんを、わたくし共が大切にいたすようになりました。すると或る日ふいと出て行ってしまわれました。」

「それはどう云う事があったのですか。」

「全く不思議な事でございます。或る日山から虎に騎の

つて帰って参られたのでございます。そしてそのまま廊下へ這入って、虎の背で詩を吟じて歩かれました。一体詩を吟ずることの好きな人で、裏の僧院でも、夜になると詩を吟ぜられました。」

「はあ。活きた阿羅漢あらかんですな。その僧院の址あとはどうなっていますか。」

「只今も明家あきやになつておりますが、折々夜になると、虎が参つて吼ほえております。」

「そんなら御苦労ながら、そこへ御案内を願ひましよう。」こう云つて、閤は座を起たつた。

道翹は蛛くもの網いを払いつつ先に立って、閨を豊干のいた
 明家に連れて行つた。日がもう暮れ掛かつたので、薄暗
 い屋内を見廻すに、がらんとして何一つ無い。道翹は身
 を屈かがめて石畳の上の虎の足跡を指さした。偶たまたま山風が窓
 の外を吹いて通つて、堆うずたかい庭の落葉を捲まき上げた。そ
 の音が寂寞せきばくを破つてざわざわと鳴ると、閨は髪あわの毛の根
 を締め附けられるように感じて、全身の肌あわに粟あわを生じた。
 閨は忙せわしげに明家を出た。そして跡から附いて来る道
 翹に言つた。「拾得と云う僧は、まだ当寺におられます
 か。」

道翹は不審らしく閻の顔を見た。「好く御存じでござ
います。先刻せんこくあちらの厨くりやで、寒山と申すものと火に当
っておりましたから、御用がおりなさるなら、呼び寄
せましようか。」

「ははあ。寒山も来ておられますか。それは願っても無
い事です。どうぞ御苦勞序ついでに厨に御案内を願いましよ
う。」

「承知いたしました」と云って、道翹は本堂に附いて西
へ歩いて行く。

閻が背後うしろから問うた。「拾得さんはいつ頃から当寺に

おられますか。」

「もう余程久しい事でございます。あれは豊干さんが松林の中から拾って帰られた捨子でございます。」

「はあ。そして当寺では何をしておられますか。」

「拾われて参ってから三年程立ちました時、食堂で上座じょうざの像に香を上げたり、燈とうみ明みようを上げたり、その外供えも

のをさせたりいたしましたそうでございます。そのうち或る日上座の像に食事を供えて置いて、自分が向き合つて一しよに食べているのを見付けられましたそうでございます。賓頭びんず盧尊者るそんじやの像がどれだけ尊たつといものか存ぜず

にいたしたごととみえます。唯今では厨で僧共の食器を洗わせております。」

「はあ」と言つて、閻は二足三足歩いてから問うた。

「それから唯今寒山と仰しやったが、それはどう云う方ですか。」

「寒山でございますか。これは当寺から西の方の寒巖と申す石窟に住んでおりますものでございます。拾得が食器を滌あらいます時、残っている飯や菜さいを竹の筒に入れて取つて置きますと、寒山はそれを貫いに参るのでございませす。」

「なる程」と云って、閻は附いて行く。心の中うちでは、そんな事をしている寒山、拾得が文殊、普賢なら、虎に騎った豊干はなんだろうなどと、田舎者いなかものが芝居を見て、どの役がどの俳優かと思ひ惑う時のような気分になつてゐるのである。

「甚はなはだむさくるしい所で」と云いつつ、道翹は閻を厨うちの中に連れ込んだ。

ここは湯気が一ぱい籠こもつていて、遽にわかに這入つて見ると、しかと物を見定めることも出来ぬ位である。その

灰色の中に大きい竈かまどが三つあつて、どれにも残った薪まきが真赤に燃えている。暫く立ち止まつて見ているうちに、石の壁に沿うて造り附けてある卓つくえの上で大勢の僧が飯や菜や汁を鍋釜なべかまから移しているのが見えて来た。

この時道翹が奥の方へ向いて、「おい、拾得」と呼び掛けた。

閻がその視線を辿たどつて、入口から一番遠い竈の前を見ると、そこに二人の僧の蹲うずくまつて火に当っているのが見えた。

一人は髪の二三寸伸びた頭を剥むき出して、足には草履ぞうり

を穿はいている。今一人は木の皮で編んだ帽を被つて、足には木履ぼくりを穿はいている。どちらにも瘦やせて身すぼらしい小男で、豊干のような大男ではない。

道翹が呼び掛けた時、頭を剥き出した方は振り向いてにやりと笑ったが、返事はしなかつた。これが拾得だに見える。帽を被つた方は身動きもしない。これが寒山なのであろう。

閻はこう見当を附つけて二人の傍そばへ進み寄よつた。そして袖を搔かき合あせて恭うやうやしく礼をして、「朝儀ちようぎ大夫たいふ、使持しじ節せつ、台州の主簿、上柱じようちゆう国こく、賜し緋魚ひぎよ袋たい、閻丘胤と申すもので

「ございます」と名告なのった。

二人は同時に閻を一目見た。それから二人で顔を見合せて腹の底から籠こみ上げて来るような笑声を出したかと思ふと、一しよに立ち上がつて、厨を駆け出して逃げた。逃げしなに寒山が「豊干がしゃべったな」と云つたのが聞えた。

驚いて跡を見送っている閻が周囲には、飯や菜や汁を盛っていた僧等が、ぞろぞろと来てたかつた。道翹は真蒼まっさおな顔をして立ち竦すくんでいた。

日本文学電子図書館

阿部一族・舞姫

著 者：森 鷗外

作成者：宮澤一郎

出版社：新潮文庫、新潮社



日本文学電子図書館